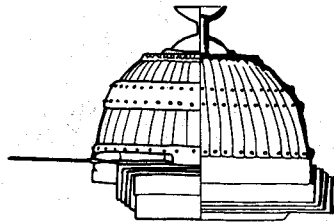


紀 要

第 4 号



1990. 12

財団法人 滋賀県文化財保護協会

7. 田んぼが魚を呼び寄せた!?

——土錘よりみた近江弥生漁業の特性——

大 沼 芳 幸

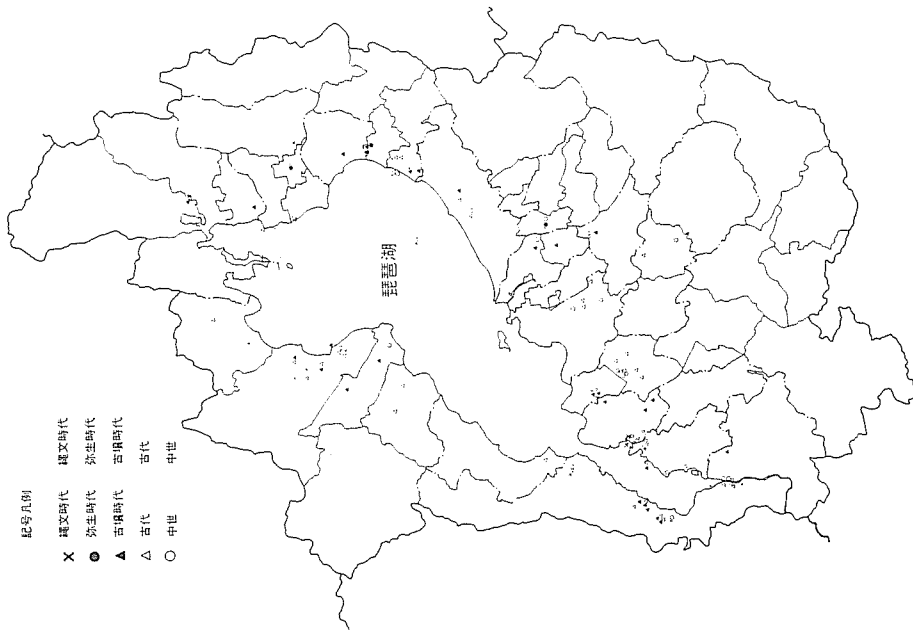
1. はじめに

近江の弥生時代の遺跡から、土錘の出土することは、なぜか希である。

眼前に琵琶湖という広大な水界を持つ近江において、漁撈は重要な意味を持っていたはずである。事実、縄文時代の遺跡からは石錘が、古墳時代から中世にかけての遺跡からは、多種多様な土錘が多量に出土しており、これらの時代に、盛んに魚を獲っていたことがわかる。また、各地に置かれた御厨の存在からも、琵琶湖においては漁撈が、きわめて重要な地位を持っていたことがうかがえる。

それでは、弥生時代の遺跡から土錘の出土が希であるということは、弥生時代の漁撈活動が不活発であったということ、物語っているのであろうか。確かに、出土遺物のみからみれば、弥生時代の漁撈は、不振であったといわざるを得ない。しかし、眼前に魚のウヨウヨいる水界が広がっているのである。生きるため、人間が魚を獲らないはずがない。土錘が少ないということは、単に網漁が、不振であったことをしめしているだけであり、むしろ、網漁に代る効率のよい漁獲法による漁撈が、より重要な地位を占めていたことを、物語っているのではなかろうか。

私は、網漁に代り、弥生時代に盛行した可能性の高い漁法として、低湿地の水田化にともない



第1図 県内における漁網錘出土地点

生まれ、発達したエリ、ウケ漁の存在を考えたい。

2. 有用魚とは

現在、琵琶湖周辺では、多くの種類の湖産魚が食膳に供えられている。これらの魚がそのまま、いわゆる原始古代においても、有用魚と認識されていたのだろうか。

人間にとって、有用な魚とはどのような魚であろうか。食用に限った場合、まず“大きい魚”であることがあげられる。大きければ大きいほど、食物としての効率が高いからである。次に“沢山獲れる魚”という要素があげられる。小さい魚でも、一時に沢山獲れば、それなりに効率のよい食物といえるからである。次に、“簡単に獲れる魚”であることも必要である。一日粘っても一匹も捕れないような魚では、有用な魚とは言い難いからである。次に“おいしい魚”であるという要素もあげられよう。やはり同じ食べるならば、うまい方がいいに決まっているからである。さらに“長生きする魚”であるという要素も必要である。すなわち、ある程度の期間活かしたままで保存できる（蓄養）魚ほど有効に利用できるからである。最後に“調理しやすい”という要素をあげたい。実際に調理する段階で、小骨が多いとか、身が少ないなど多くの労力を要する魚では、有用とは言い難いからである。

以上、6つの要素を、現在、琵琶湖水系でみられる魚に当てはめ、点数を与えたのが表-1である。この結果、最も有用であると考えられる魚は、ブラックバス、ゲンゴロブナであり、次にニゴロブナ、ニゴイ、ウナギ、キンブナ、ギンブナの順になる。ブラックバスは、近年琵琶湖

琵琶湖水系で獲れる魚の有用度チェックその1

	大 き い	沢山とれる	簡単にとれる	う ま い	長生きする	調理しやすい
ウ ナ ギ	◎	○	○	◎	◎	○
イ ワ ナ	○	○	△	◎	○	◎
ア マ ゴ	○	○	△	◎	△	◎
ビ ワ マ ス	◎	△	△	◎	×	◎
ア ユ	△	○	○	◎	△	◎
コ ア ユ	×	◎	○	◎	×	○
ウ グ イ	○	◎	◎	○	×	△
アブラハヤ	△	△	△	○	×	△
カワムツ	△	×	△	△	×	△
オイカワ	△	○	○	○	×	○
ハ ス	○	○	○	○	△	○
ワ タ カ	○	○	○	△	×	△
カマツカ	○	△	△	○	○	○
ヒ ガ イ	△	○	△	○	○	○
タモロコ	△	△	△	△	△	△
ホンモロコ	△	○	○	◎	△	○
ニゴイ	◎	◎	◎	○	◎	△
コ イ	◎	◎	◎	◎	◎	◎
キンブナ	○	◎	◎	○	◎	○
ギンブナ	○	◎	◎	○	◎	○

への侵略を開始した外来魚であるから除外すれば、有用魚には、コイ科の魚が多いことに気がつく。このうち、ニゴイは琵琶湖及び、比較的流れのある礫底質の河川をこのむ。これに対して、他のコイ科の魚はいずれも、泥底質の止水をこのみ、晩春から初夏にかけて、大拳して湖岸や内湖に押し寄せて、産卵する性質を持っている。この産卵行動の引き金になるのは、大雨による“水の濁り”であると、湖岸の漁師は体験的に理解している。そして、この“水の濁り”をもたらす最大の原因は、水田からの排水である。

3. コイやフナの獲れる川

1980年ごろ、志賀町と高島町を流れる川の河口部における、現行漁撈を調べたことがある⁽¹⁾。その結果、ほとんどの川の河口部で、なんらかの形での魚とりが認められた。そして、漁獲の対象になる魚を中心に川を見た場合、2つの形態があることが注目された。1つは、アユ、マスを漁獲の対象とする川であり、1つはコイ、フナを漁獲の対象にする川である。前者の川には、水源を山中にもつ、流程が長く、流速の早い、礫底質の川が多い。それに対して、後者の川には、水源を山裾もしくは平野部にもつ、流程が短く、流速の遅い、泥底質の川が多い。この後者の川のうち、志賀町内の川では、大型のウケによる漁により、高島町内の川では、カワエリによりコイ、フナを中心とする漁が行われていた。今仮りにこれらの川を、コイ、フナ型の川としよう。コイ、フナ型の川は、いずれも水田中を流れ、この排水を集める川で、その流量は、梅雨から夏にかけて、水田から吐き出される濁りを含んだ水を大量に集め、ピークに達する。そしてこの濁り水が

琵琶湖水系で獲れる魚の有用度チェックその2

◎ 10点 ○ 5点 △ 3点 × 1点

60点満点

	大 き い	沢山とれる	簡単にとれる	う ま い	長生きする	調理しやすい
ゲンゴロウブナ	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ニゴロブナ	◎	○	◎	◎	◎	◎
ボテジャコ	×	○	○	△	△	×
ドジョウ	×	○	○	○	○	○
アユモドキ	△	×	×	○	×	△
ギギ	○	○	○	◎	○	△
ナマズ	◎	○	○	○	○	○
ビワコオオナマズ	◎	△	△	△	△	△
イワトコナマズ	◎	○	△	○	○	○
メダカ	×	×	△	×	×	×
トゲウオ	×	×	×	×	×	×
タイワンドジョウ	◎	△	△	○	○	○
ブラックバス	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ブルーギル	△	◎	◎	○	○	○
ドンコ	×	△	△	○	△	○
ゴリ	×	◎	△	○	×	○
イサザ	×	◎	△	○	×	○
スジエビ	×	◎	○	○	△	○
テナガエビ	×	△	△	○	△	○
シジミ	×	○	○	○	○	○

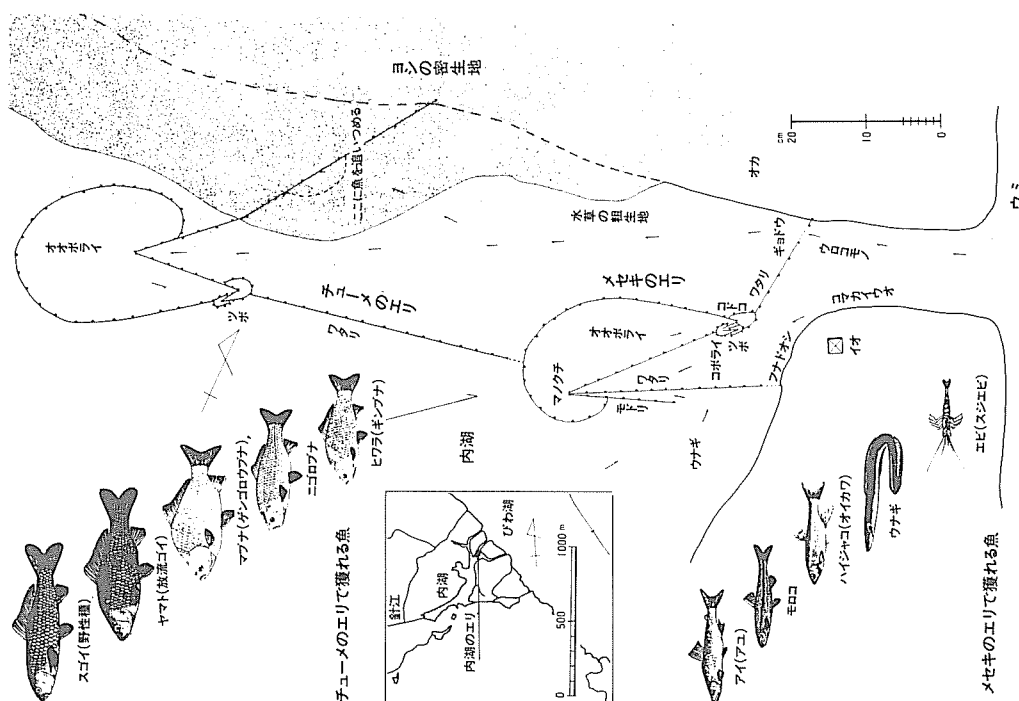
コイ、フナの産卵行動の引き金になるのである。いふなれば、水田がコイ、フナをよび寄せるのである。事実、この時期コイ、フナたちは、水田の中にまで侵入し、苗の間を悠々と泳ぎまわっていたそうである。そして、湖岸の人々は、老いも若きもフセカゴやヤス、トアミまで持出し水田中のコイ、フナをとったものであるという。

4. 弥生的漁法の発生

このような状況を弥生時代に当てはめたらどうであろうか。

湖岸の低湿地を利用し、水田を切り開いていった弥生人たちは、毎年決まった時期に水田からの濁りに誘われ、排水中をのぼって来るコイ、フナを見たとき、思わぬ副産物に狂喜したに違いない。そして、排水路を遮蔽し、魚を1ヶ所に集める罟を仕掛ければ、労せず魚をとれることにきづいたではなからうか。すなわち、これがカワエリの初源的な姿であり、さらにこれを発展させたのが内湖のエリである。

エリ漁は、漁具を設置すれば、あとは魚が入るのを待つて漁獲するだけであるから、積極的に魚に働きかけることの少ない“待ち”の漁法である。またその漁獲法は漁(猟)というよりはむしろ収穫に近いものがある。エリ漁は、まさしく農民的な感性にもとづく漁法(弥生的漁法)であるといえる。これに類するものとしては、ウケ、ヤナ等の漁法があげられる。

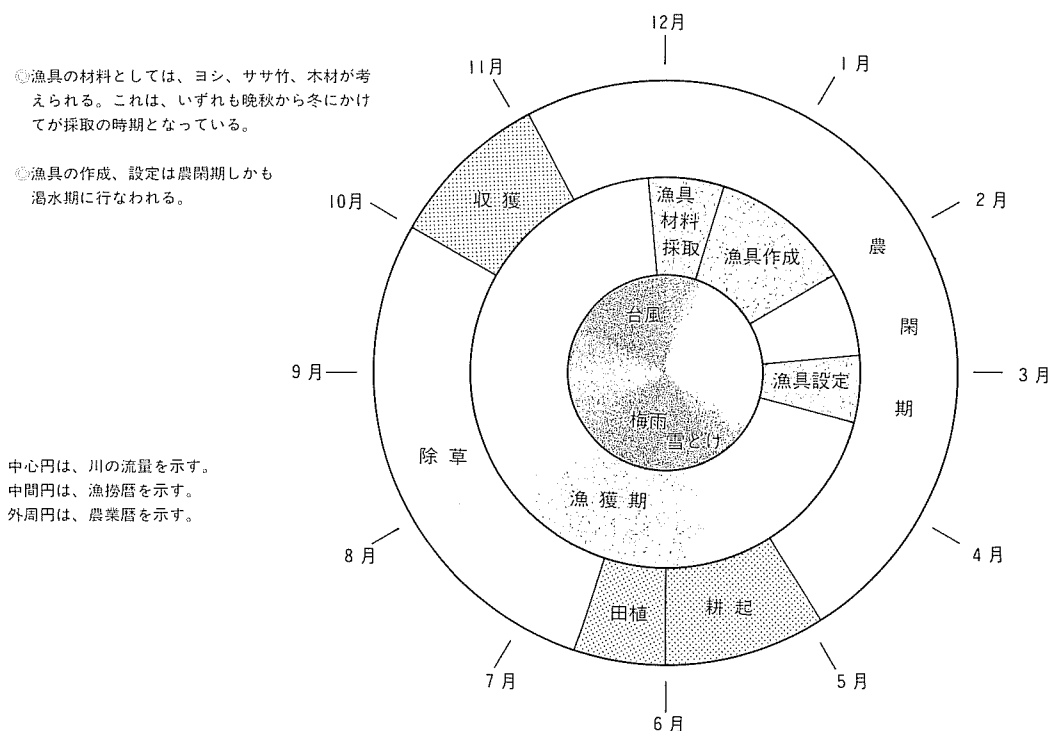


第2図 内湖のエリの概念図(高島郡新旭町針江)

5. 弥生的漁法と農民の一年

湖岸に生きた人たちの主な生業を、水田耕作による農耕と考えた場合、この中で弥生的漁法はどのような地位を持っていたであろうか。まず、弥生人の一年を農作を中心に見てみよう。いわゆる農繁期は、耕起及び田植えの時期（春）と収穫（秋）の時期である。無論、これ以外の時期にも除草や水路の補修、わら仕事などの農作業が考えられるが、すべてを投げ出して農作業に打ち込む時期とはいえない。次に、弥生的漁法による一年を想定して見よう。漁は、春から夏にかけて漁獲のピークを迎える。その後、エリは放置され、冬から春にかけて漁具の材料の入手、作成、設定という作業が行われる。農作業暦と、漁業暦とをオーバーラップさせて見ると、両者の繁忙期は微妙に異なっていることがわかる。さらに、漁獲は深夜から早朝にかけて行われることから、両者を並立させることは、容易に可能である。すなわち、湖岸の弥生人は、農民であると同時に漁師でも有り得たわけである。

湖岸の弥生人の生業が農耕であったならば、労働力は、農耕に集中せざるを得ない。しかし、弥生人たちが米だけを食べて生きられたはずがない当然、貴重なタンパク源としての魚への欲求は有ったはずである。これを、農作業と並行して、しかも少ない労力で得られるとすればどうであろうか。季節ごとに、琵琶湖や内湖に漕ぎ出で行う、より専門的な漁を採る必要性は、当然低くなるであろう。さらに、現行の内湖のエリ漁に見られるような、一時的な大型魚の蓄養や、エ



第3図 弥生人の農業暦と漁業暦

りの簀を変換することにより、小型の魚を周年漁獲する技術が確立すれば、なおさらである⁽²⁾。

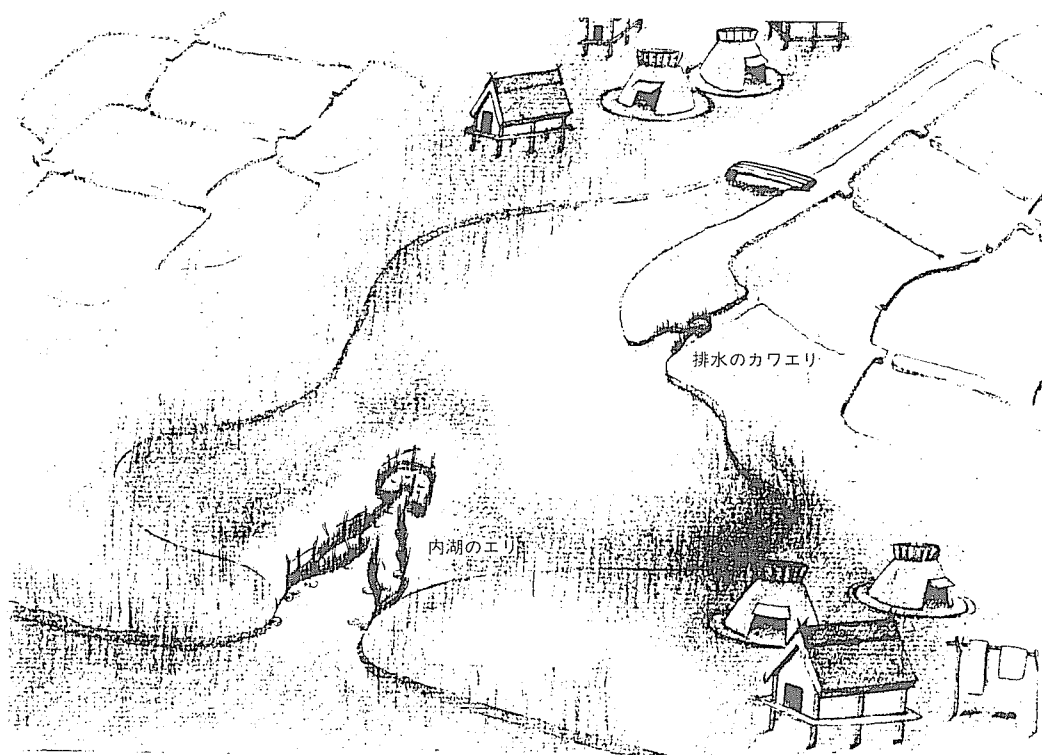
6. 近江の弥生時代の遺跡から、土錘が出土することは希である。

以上見てきたように、湖岸の水田開発に伴う漁場環境の変化が、弥生時代の漁撈を前代とは異なったものに変質させたのではあるまいか。そしてこのことが“近江の弥生時代の遺跡から、土錘が出土することは希である”という現象をもたらすことになったのであろう。

土錘の出土量から見れば、近江においては、古墳時代以降社会的な魚需要の増大にともない、再び網漁が採用される。そして、古代末から中世にかけて網漁は飛躍的な発展を遂げることになる。

注

- (1) 滋賀県教育委員会『琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書』4（1981年）
- (2) 大沼芳幸「内湖のエリ ——弥生的漁法——」（『滋賀文化財だより』138 1989年）



第4図 弥生時代の湖岸の村、高島郡新旭町針江遺跡群のイメージ

編集後記

本年度は協会設立20周年。これに伴う展示会や記念誌の発行等色々な事業を実施した。本号も20周年を祝う意味で、職員全員の投稿を呼びかけたところ、ほぼ全員の27名の参加を得、発刊することができた。紀要の充実はみんなの頑張りによるところが大で、次号以降も編集者を悩ませるほどの投稿を期待したい。

平成2年12月

紀 要 第 4 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241